

あまりの話題作なので気になって見てみた。TV版は見えていない。

序（1作目）

第一印象は「メンヘラの中二男子に世界の運命が託されるという新機軸???'」である。話題作となり多数のコアなファンを生み出した理由が全く見えない。中年になって初見してもとりつくしまのない話なのか。それにしても観た後いくつかしっくりこない事象が残るのが気になってくる。

*主要人物は全員メンタルおかしい（シンジ、レイ、ミサト、ゲンドウ）。健全さから外れてしまった子供がいるのは特別おかしなストーリーではないが、大人も異常なのが気になる。ミサトはゴミだらけの部屋に住んでおり、個性的なキャラというよりは闇を抱えた弱い大人という印象を受ける。ストーリー的にはシンジをガイドする（できる）思慮と経験値を持つ大人の役回りのはずなのに何故？ゲンドウに至っては立場は感じるが、感情はまるで見えない。いつもサングラスしてるし。

*何もない部屋で白い蛍光灯の下でシンジが意識を取り戻すシーンが繰り返し出てくる。丁寧に描いてあるので何かの意味を込めてあるらしいが、これは何？全身麻酔が切れて意識が戻る状況を連想した。

*シンジの母親と父親の存在が大きいのも気になる。シンジは父親の命令に従って母親の魂と共に戦うのである。母親の魂とシンクロしなければ戦えないし、戦うときは羊水のような液体に浸る。ヒロインその1であるレイも母親の魂を持つ。シンジは父親と母親に囲まれている。

*エヴァが戦う敵である使徒が攻めてくる目的と彼らの立場が全く描かれておらず空白になっている。コアブロックにあるリリスを狙っている、ということだが、狙ってどうする？使徒にとって何かいいことあるのか？そもそも使徒って何？何故一体ずつやってくる？勝つ気あるのか？

*最初の使徒についている小さな仮面は印象的。顔はなくて仮面がついている。どの使徒も同じ顔（仮面）をしている。まるで記号のよう。

*エヴァはロボットというよりは獣のようである。ロボットモノは操作するパイロットが能力の拡張感とか万能感を持つようなテイストのものが多くはいるはずだが（山本私見）、この話は違うらしい。操縦は難しく、エヴァが暴走することもある。エヴァの「コントロール」か操縦者との「フィッティング」がテーマのひとつになっている???

*エヴァの戦闘シーンが妙に生々しくグロテスク。レーザーや銃を撃つシーンはよいが、近接戦（プログレッシブナイフで戦うシーンとか）は禍々しい印象。

*14歳でなければならないパイロット達、特にシンジのために基地の大人全員が働いている。エヴァの充電やセットアップ、戦闘後の修理等々。大人たちが子供たちのために働いているよ

うな形である。この構図に違和感。

*エヴァの起動時間が5分間限定というのも違和感がある。こんな設定はウルトラマン以外では見たことがない。ウルトラマンは尺の短いTV番組なので戦闘シーンは3分までと決めたのはわからないでもないが、映画でこの設定は謎。この設定により基地の大人たちの戦闘前の準備と戦闘後の諸々の作業が目立つ。「実験」をしているようにも見える。

*冒頭のシーンでレイが一瞬現れるが、このシーンは序のストーリーには取り込まれずに終わる。何かの意図を感じる、が話が繋がらない。

*見間違いかも知れないが、Nerv基地は地下の大空洞にあり、そこから地下部(コアブロック?)への入り口の形状が「四角い大穴+横に小さめの四角錐」であった。四角錐は動いてフタになる訳ではなく、開口部は開きっぱなし。意図的なデザインに見えるが、不自然な形状である。この映画にはこういう謎がたくさんあり、あちこちで表層のストーリー(大きな敵と戦い世界を救う少年ヒーロー)を否定しているようにも見えてしまう。

*背景で聞こえるひぐらしとセミの鳴声が幻想的、基地から逃亡するシーンは現実感が希薄。

*舞台である新第三首都がなぜ箱根?世界を守るのなら東京でいいのでは?

*箱根の森からニョキニョキとビルが生えてきたり引っ込んだりするの面白かった。

*Seeleがゲンドウとごによごによ話している内容は全く理解できないが、これは無視してもいいような気がした(のでそうした)。

破(2作目)

*新たな主要人物としてヒロインその2(アスカ)がでてくる。この子もメンタル異常(しかし軽症)。

*エヴァが武器なしで戦うシーンは前回に増してグロテスク。本当に見たくない。

*グロい戦闘の際の音楽が変。盛り上げて感動させようとしているのとは違うような。グロさを増幅している?ついていけない。全くついていけない。

*エンディングで大きなイベントが短時間に連続して起こる。私は置いてきぼりにあった。アスカエヴァが使徒認定されて破壊されシンジがNerv基地を出た後に、

(1)使徒現る、(2)マリエヴァ負ける、(3)レイエヴァ自爆覚悟で使徒に立ち向かうがレイエヴァも負ける、(4)使徒がレイエヴァを捕食、(5)シンジは基地に戻りエヴァに乗る、(6)シンジエヴァは使徒と戦うが途中で電池切れる、(7)シンジの怒り(目が赤い)からシンジエヴァ覚醒し、(8)レイを救出、(9)同時に覚醒により世界が減びようとする(サードインパクト)が、(10)突然月からカオルエヴァが現れ覚醒したシンジエヴァを槍で突き刺しサードインパクトを止める、(11)映画終了と一気に進む。特に(10)は一瞬で起こり、「今の何?」という感じで(11)になった。

(3)まではよいとして、(4)はヘンである。そんな話聞いてない。それまで描かれていなかった使徒の性格や目的を示すために取り入れられたのだとしても、映画のエンディングでする話ではない。違和感が残る。(7)(8)はよいが、(9)はもっと変だ。エヴァは(5)から地球を救うために戦っていたはずである。戦い勝ちそして世界を滅ぼす？そういう状況現実や他作品ではあり得るが(文明批判モノである。「人類は神をも恐れぬ発明をしてしまったのだ」等々)、話の流れとこの映画のテーマを考えると受け入れられない。(8)まではエヴァシンジを応援していたのに騙されたようになる。エヴァ覚醒のきっかけであるシンジの感情が世界の運命に反映されるところもおかしい。これだとシンジの心情=世界の運命になってしまう。(10)はストーリー上異常な(9)をもとに戻すという意味ではありえる展開なのかも知れないが唐突感が強く残る。普通なら(9)の可能性やカオルについて事前に十分説明しておいて、(10)でカタルシスを得られるように描くはず。この映画はやっぱり変。すごく変。

ネットでちょっと調べてみると、小児向けの精神科医が「最近エヴァンゲリオンの話を熱心に語る患者が多くなり、私も観てみたらハマってしまった」という記事に出会う。この精神科医がエヴァの登場人物の診断をしていた。やはり診断がつくのだ。

ということで、違和感が残った事象がしっくりくるように話を再構築することにした。個々の事象を組み合わせて世界を構築するのはサイエンスと同じ作業である。いつも通りに「最もシンプルな構築方法、全体像が感覚的に受け入れ可能であること、主要な事象が取り込めるならある程度の積み残しや齟齬は気にしない」で進める。

中心はシンジであり、シンジに接しているのはエヴァ、ゲンドウ、レイ、ミサト、アスカ、Nerv。使徒はシンジから見るとエヴァの向こう側にいる気もするのでちょっと置いておく。Seeleやゲンドウの友人(将棋をさすおじいさん)もシンジから見るとゲンドウの向こう側なのでいったん脇に。なんとか補完計画と死海文書？もとりあえずは無視。

再解釈してもう一度序破を観た。表層のストーリー(巨大な敵から地球を守る少年ヒーロー)と裏のストーリーのどちらか一方だけでは一本の映画を通して観られないようになっているらしい。段差のある道をガタガタと車で走るような感じで、両方のストーリーを行ったり来たりすることが強いられる。観ていると、裏ストーリーの修正の必要を感じる。そしてもう一度観たくなる。変わった映画である。

監督がプロット作成を独占し他人の介入を許さない、監督は男性で商業ベースの仕事には向かないタイプ、と見た。何かのトラウマを抱えておりそれを昇華させたいのかも。小説ではあり得ても、大人数で製作する商業アニメではとてもありえない作品を実現させたのは力技。表面的に似たアニメを誘発したのは「それは違うでしょう」と思った。

ストーリーの再構築：

*基地(Nerv=神経)は長期治療のための病院(精神科)かサナトリウム(なので箱根が舞台)、シンジは患者、ミサトは主治医、アスカやクラスメート達は病院の入院患者かシンジの学校の同級生。ゴンドウとレイはシンジの空想上の人物。ぐったりと醜いリリスはシンジの深層のエゴであり、他人に見られてしまったら世界が滅びる。赤い海の世界はシンジが構築したものであり、使徒は自分に近づきすぎた他人か学校でのいじめっ子、というシンジの内面世界の話に

する。

*森や学校があるときは現実の箱根であるが、ビルがによきによき生えてくると想像の世界に覆われていく。最初にレイが現れるシーンはレイが創造されたということであり、空想の世界の入り口であることを暗示する。

*レイはシンジが作った想像上の女友達である。母親のエッセンスが入っている。シンジには他人の感情や人間性（特に女性）を想像することができないのでこんなキャラである。はからずして人気者になってしまったのは面白い。

*使徒は顔の無い敵である。シンジには他人に感情や性格、歴史があるということが理解できない。敵は記号であり、破壊して構わない。

*シンジの入院当初は自我が弱くて他人に抵抗する、ということができなかったのでミサトを始め基地の全員はシンジがエヴァに乗れるように治療を進める（この解釈には若干違和感が残る）。

*あるいは、エヴァに乗る＝自分の体を動かす、ということなのかも知れない。これだとエヴァとのフィッティングの難易度が高いところ、フィッティングを高めるために基地の大人達が尽力するところがうまく説明できる。エヴァのパイロット達は自分の体を思うように動かさない病の子供達であり、シンジ以外のエヴァ操縦については禍々しさが感じられないのも納得である。使徒出現=>エヴァ起動という流れとは話が合わないが、それ以外のところはかなりハマる。端的に言えば自己が分裂している病であり、再び一体化することが治癒ということになる（素人考え）。

*ただ、シンジに限りエヴァに乗るといつも禍々しい暴力シーン（エヴァは野獣化、グロい近接戦）になってしまう。なので、シンジには別の病もあるということにする。まとめると、一般的には「エヴァと一体化＝治癒」だが、シンジの場合には「エヴァと一体化＝野獣化」がありうる。分裂して病んでいるシンジの治療のためにエヴァに乗せるのだが、乗ったら乗ったで別の病が現れる。話がややこしくなるが、よりシンプルな解釈を思いつかないのでこれでいく。

*使徒は基本は「エヴァの敵」であるが、前述のようにエヴァに二態あるなら使徒の意味合いもややこしくなる。野獣エヴァの敵ならシンジの敵でありシンジの暴力の犠牲者、通常エヴァの敵ならエヴァ起動の口実程度の意味合いになる。どちらにしても使徒が負けるのなら結果に違いは生じない。

*主治医ミサトが子供っぽくて弱い心を持っているのは、そうであるからこそシンジに受け入れられている、と考える。シンジには大人は受け入れられない。

*シンジは自分の意思による行動からは逃げており、父ゲンドウの命令を受けている、というテイにして生きている。そのためにゲンドウを創造した。自分の行為の免責装置はゲンドウ以外にも発明されている（エヴァの操縦が乗っ取られる）。

*上の話は健常者なら「周到に責任逃れをしている」ということになるが、自我の精神が衰弱して、「中央指令系統が超低レベル」に落ちてしまっている患者の場合には「指令シグナル不在のためノイズによる誤作動が生じている」ような状況である（素人考えだが）。ゲンドウが強力

なのでやられているというよりは、ノイズをはねのける強力な指令系統が不在なのが問題なのであり、シンジの性格とは別物であると捉えたい。

*共に戦っているパイロットが突然使徒に汚染される、というのは、親しいクラスメートがシンジに近づきすぎてしまったか、シンジの意に沿わない行動をとってしまったためシンジから敵認定を受けた、と解釈する。

*戦闘時間が5分間限定というのは発作を連想させる。コントロールを外れた発作（暴力）は通常の戦闘でも（グロテスクに）示されるが、エヴァの覚醒状態として強調される場合もある。「発作>>相手への大きなダメージ>>蛍光灯の下で苦い感情と共にシンジ目覚める」、という流れは映画の中で繰り返される。蛍光灯の下で目覚めるシーンはまるでんかんの発作の後のよう。シンジのエヴァ操縦と他のパイロットの場合とが異なる扱いになっているようであるが、これはシンジの場合にのみ当てはまる。あるいは5分間は治療の時間ということなのかも知れない。準備して、療法を試みて、データを集める。

*登場人物の中でのシンジの暴力による被害者はトウジの妹とアスカ。シンジとトウジは和解しているが、これはシンジの願望かも。

*アスカは敵認定されてシンジにやられてしまう（大きなダメージを負って世界から退場）。シンジに近づきすぎたのか治癒して疎まれたのか。「エヴァの操縦を乗っ取られた」というテイになっているがシンジ自らが手を下した。シンジがコアブロック入り口のピラミッドを壊す行動は自傷行為を示す。

*シンジのエヴァ初号機が常に野獣だとすると、シンジがエヴァに乗る＝シンジ野獣化である。初号機の覚醒＝野獣化という話なのかも知れないが、覚醒していなくても十分野獣である。主治医ミサトがシンジにエヴァ搭乗を勧めるはちょっとおかしくなる。合わないと言えば、主治医ミサトの上司がシンジの暴力を強制（免責）するゲンドウであるのもおかしい構図である。

*もういちど観てみて感じたが、いつも突然現れる使徒はストーリーを進めるためのきっかけとして使われているようである。見せたいのはやはりシンジ達の対応の方である。

*無理がある表層のストーリーを納得させるための仕組みが映画のどこかにあるはずである。再見の際にも聞き流していたが、ゲンドウの会話がそれにあたるのかも知れない（補完計画がどうか）。

*破の最後でレイを奪われかけたシンジはレイへの執着のためにエヴァを覚醒（発作、暴力）させてしまう。ところが、カオルが現れて覚醒を止めてくれたのである。カオルもシンジの発明品である。ということはシンジは自分の力で発作を止めることができた、という解釈になる。アスカはいない、ミサトには救えない、という状況ではあるが若干の希望が持てる展開。

*タイトルがエヴァンゲリオン＝福音書なのだから、よくは知らないが死と復活のストーリーになるのだろうか。そうでなければメンヘラ中二男子のVR世界を見せただけになってしまい、「そんな映画誰が観るの？」である。なので、明るい結末は必須である。復活があったとしても「誰が観るの？」となるような気も大いにするが、、、、まあ、少なくとも。

*復活のためには、ゲンドウとレイは世界から消えて、エヴァンゲリオンも消えないといけな

い。そうやって初めて青空と青い海、箱根の森と平和な学園が復活する。

*救世主は誰だろう。アスカはひどい目にあって世界から退場してしまった。ミサト？今までミサトはエヴァの戦闘シーンを見てるだけで手を出せていないし、医者が患者を治癒する話ではドラマにならない。シンジが自力で復活する？そんな兆しはないが、カオルの助けがあれば可能かも。

Q (3作目)

*Qでは表層のストーリー(大きな敵と戦い世界を救う少年ヒーロー)が大きく破綻していく。物語に二重の意味を持たせ、表層のストーリーを破綻なく描きつつ裏の意味をそれとなく感じさせるのが上品で深みを生むストーリーテリングであるが、映画エヴァンゲリオンは違う。表層のストーリーは破綻しており、そこにとどまることは許されていない。

*シンジは常に病んだ目をしているが、時々それが強調されるのがグロテスク。

*アスカ復活。しかも健康に成長している様子。眼帯は前作で受けたダメージの印か。シンジの世界から消えずに居残っており、しかもビーストモード全開でシンジのために戦っている、その献身性に感動。個人的には映画シリーズの主役と捉えたい。

*ミサトのサングラス。Qではミサトの子供らしさや弱いところは見えなくなってシンジと距離ができた様子(サングラスはその象徴)。しかし、ミサトは使徒(敵)認定されずにサングラスをかけるだけで済んでいる。そういえばQではもう使徒らしい使徒は現れない。世界は好転しているのかも。

*Nerv=神経と戦う Wille=意思。もともと存在感の薄かった Seele=魂は Nerv に消されてしまう。ゲンドウとミサトは対立し、戦う立場になることで状況はすっきりした。赤い海派のゲンドウ(神経)と青い海派のミサト(意思)である。

*Wunder=奇跡。ミサトはこれまで直接戦うことはなかったが、Qではシンジの武器(エヴァ初号機)を作り変えてミサトの武器 Wunder にしてしまった。これはどういう意味だろう。シンジが衰弱してシンジの体は主治医ミサトの管理下に入った、ということだろうか。あるいは、シンジの行動をミサトが拘束している、ということかも知れない。

*レイ。前のレイは消えてしまったのでシンジが作り直した、が破の前作より空っぽな仕上がりである。最後のシーンでよろよろとシンジとアスカについていくのが不気味。

*カオル。カオルはレイ同様シンジの発明品だが、破 Q では良い仕事をしている。シンジの致命的な危機を二度とも阻止しているし、音楽を使ってセラピー的なこともしている。復活後の世界でもシンジはカオルと一緒に生きていく、というのもアリかも知れない。

*鈴原サクラ。Q で一番意外だった。序ではシンジの暴力の被害者だったはずだが。

*Q は破の14年後という設定だったが、序破 Q 通してひと夏の話なのかも。

*シンジは弱っており世界は荒廃しているが、仮面を付けた使徒らしい使徒は現れない、シンジがエヴァ初号機に乗る機会はない、エヴァ初号機がシンジに反応するのはアスカを助ける場面だけ、レイは弱っている、と、シンジ世界の正常化の兆しを感じられる。最後の青空のシーンも希望を感じさせる。

*今後の展望。ノルマであるはずの死と復活のうち「死」は Q の最後で部分的には達成されたのだろうか。カオルと共にシンジの乗れるエヴァは破壊された。だが、ゴンドウとレイはまだ生き残っており、完全な「死」を迎えたのではない。ゴンドウは誰が倒すのだろうか。ミサトが Wunder=奇跡を使って？レイが刺し違える？カオルを復活させてシンジと一緒に？ ゴンドウもレイもいなくなった世界はアスカが導いて復活させる、に一票。リアルに戻った世界で冷たい風が吹いて、相変わらず半袖のシンジが「寒いよ」というとアスカが「さっさと慣れなさいよ、バカシンジ」と返す、みたいなエンディングはどうだろう。

*見なおして気づいたが、ミサトの Wunder は「神殺し」と呼ばれていた。世界の神=シンジの神はゴンドウである。シンジの意思を受けた Wunder をミサトが操りゴンドウを片付ける、という流れになるのであろうか。

アスカのビーストモード

昔ダーククリスタルという人形劇の映画を観た (1982)。話が中ほどまで進んだところで、主人公の男の子 (和音が出せる二股フルートを持ち歩いている) と旅を共にする女の子が崖から落ちるのだが、女の子の背中のおかげで二人とも助かるのである。男の子が「君が飛べるなんて知らなかったよ」というと女の子は「だって女の子だもの」と返す。この映画を観て私は「女の子には羽が生えている」ことを学習した (実物はまだ見てないので信仰というか、そんな感じである)。

そんな私であるが、エヴァンゲリオン序破 Q を観て「女の子にはビーストモードがある」ことを一瞬で理解したのであった (2021)。アスカのビーストモードはシンジを救うためにのみ使われるのであり、その名や形状に反してとても尊いものである。私はメンヘラのシンジにも彼の世界にも全く興味を持ってないので、彼の世界が赤い海に覆われようがリリースが外界に醜い姿を晒そうがどうでもよいが、アスカの捨て身の奮闘だけは報われて欲しいと切に思った。(嫌いつつもハマってきたのかも)